口演速記

明治大正落語集成

第一巻

講談社

N.D.C. 910　520P　22cm

口演速記明治大正落語集成　第一巻

定価　二千五百円

昭和五十五年三月十日　第一刷発行
昭和五十五年六月十日　第二刷発行

編　者　暉峻康隆　興津要　榎本滋民
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
郵便番号一一二　振替　東京八―三九三〇
電話　東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社

©講談社一九八〇年
＊落丁本乱丁本はお取りかえいたします。

0393-441814-2253(0)（文芸局）　Printed in Japan

口演速記 明治大正落語集成 第一巻 目次

成田小僧……三遊亭円遊 七
成田小僧（下ノ巻）……三遊亭円遊 一四
乾物箱……三遊亭円遊 二四
鼻毛……三遊亭円遊 三一
鰍沢雪の酒宴……三遊亭円生 三四
思案の外幇間の当込み……三遊亭円遊 四〇
将棋の殿さま……禽語楼小さん 四六
隅田の馴染め……三遊亭円遊 五四
お節徳三郎恋の仮名文……禽語楼小さん 六六
お節徳三郎（下の巻）……三遊亭新朝 七四
お節徳三郎連理の梅枝……春風亭柳枝 七九
船徳……三遊亭円遊 九四
素人浄瑠璃……禽語楼小さん 一〇五
天災……古今亭今輔 一二四
王子の幇間……三遊亭円遊 一二九
小言幸兵衛……古今亭今輔 一三三
羽織の女郎買ひ……古今亭今輔 一三八
かつぎや五兵衛……禽語楼小さん 一四五
転宅……古今亭今輔 一五九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

錦嚢（きんなう）……古今亭今輔 一六七
姫かたり……三遊亭円遊 一七三
戒名万金丹……禽語楼小さん 一八一
鉄拐（てつかひ）……禽語楼小さん 一八六
恵方詣……三遊亭円遊 二〇〇
樟脳玉……古今亭今輔 二〇七
樟脳玉（下の巻）……三遊亭円遊 二一四
おふみ……古今亭今輔 二二〇
入れ髪……三遊亭円遊 二二七
星野屋……春風亭柳枝 二三八
お祭佐七……禽語楼小さん 二四九
締込……三遊亭円生 二六三
閉込み……柳家小さん 二六八
阿七（おしち）……三遊亭円遊 二七七
松枝宿の子殺し……三遊亭新朝 二八七
磯の白浪……土橋亭りう馬 二九五
つよがり……三遊亭円遊 三一二
波天奈廼茶碗（はてなのちやわん）……春風亭柳枝 三一九
蕎麦の羽織……三遊亭円生 三二九

二階の間男……三遊亭円遊 三三二
初音の鼓……三遊亭円遊 三三五
巌流島……三遊亭円生 三三九
殿様の廓通ひ……禽語楼小さん 三四三
鹿焼失……三遊亭遊三 三五八
牛の嫁入……三遊亭円遊 三六四
臑咬り（すねかぢり）……三遊亭円遊 三七三
嵩谷（すうこく）……禽語楼小さん 三八〇
子別れ……春風亭柳枝 三九一
宮戸川……春風亭柳枝 三九九
素人洋食……三遊亭円遊 四一三
燃切り（たちきり）……桂　文楽 四二〇
茶碗屋敷……春風亭柳枝 四二七
ズツコケ……三遊亭円遊 四三八
疝気の虫……三遊亭円遊 四四五
工風（くふう）の医者……三遊亭円遊 四四九
英国の落話（おとしばなし）……英人ブラック 四五一
角兵衛の婚礼……三遊亭円遊 四五七
大工の訴訟（しらべ）……禽語楼小さん 四六四

穴蔵の泥棒……三遊亭円遊　四七三
編集総説　暉峻康隆……四八一
演目解説　興津　要／榎本滋民……四八九
演者小伝　暉峻康隆……五二一
校訂基準……五二六

◎「口演速記明治大正落語集成」編纂摘記

●本集成は、明治大正期において質量ともに最も充実した落語速記録掲載雑誌である「百花園」と「文芸倶楽部」を中心とし、その他の雑誌・単行本を補って編纂した。

●「百花園」（東京・金蘭社刊）は明治二十二年五月創刊。明治三十年九月までは毎月二回、以後三十三年十一月まで月一回の刊行で総計二百四十冊が現在確認されている。落語講談速記雑誌の嚆矢であり、一流演者を揃えて大いに盛行した。内容は講談と人情噺の長期連載と、一回ないし数回で一話完結の落語を掲載している。本集成はこの落語を、甚しく纏まりを欠く数話を除いて全編収録する。

●「文芸倶楽部」（東京・博文館刊）は明治二十八年創刊、三十年九月からは殆んど毎号落語速記を掲載した。明治三十二年以降は、ほぼ毎年、二回の落語増刊号を発行して大正末に至っている。その中から「百花園」には無い落語と、「百花園」収載のものとは演出法が大きく異なる落語を選んで収録する。

●「百花園」の成功に刺激されて続出した類誌に「百千鳥」（大阪・駸々堂）「花筐」（東京・金泉堂）「都錦」（東京・錦華社）などがあり、「講談倶楽部」（東京・講談社）も落語速記を掲載した。これら各誌及び多数刊行された単行本からも採るべき落語を補っている。

●本集成は収録に当って、速記者名が明記されていることを条件とした。大正期から多くなるいわゆる「書き落語」と区別する意図あってのことである。書名角書に「口演速記」と戴したのも、口演通りの復元すなわち演者の訛りや語り癖をも忠実に採録した速記であることを示したものに他ならない。

●各編の配列は原資料別にまとめ、掲載年次順としたが、「百花園」で同じ噺を上下に分けて別号に載せている場合、また同じ噺を別の演者が別号で演じている場合は、これを並べて掲載し、一話を通しての鑑賞あるいは演出比較の便を図った。

●各編末に掲載誌（書）名・巻号・発行年月日を注記したが、雑誌連載の場合は各回末にこれを付し、一行あきで次回を続けて分載個所を示した。

●本巻は、「百花園」の一号（明治二十二年五月）から五十号（明治二十四年五月）までの落語五十五話と、同話並載の方針により後の号より移した三話、計五十八話を収める。

成田小僧

三代目 三遊亭円遊 口演
酒井昇造 速記

エー彼の先代の柳枝の持ち話と申ます、成田小僧と云ふ、極く饒舌りナ小僧さんが、深川の松本へ参るお話を今様に改正して一席弁じ上げます。当今では小僧衆も大分進歩んで参りまして、何んでも大人を遠廻はしに釣出すやうナ事に相成ました。モウ十三四才位で立派に小学校を卒業なさるかと思ふと、五十六才八ケ月で初等六級を落第するなかと云ふのだから中々肯ませんが。小供は何地で遊んで居らツしやツても少しツツお遊びの変つて居ますのは誠に不思議で御座います。過般も円遊が丁度下谷の二長町辺を通行ますると、坊ちやん方が三人集て裁判子ツ子をなすツて居らツしやいました。

甲「アノお願ひ申ます」

乙「何んじやナ」

甲「お役人さまにお伺ひ申ますが、アノ燈心の論でス。私は山吹の枝から燈心は取れるんだてエと、此子が然うじやない、畳の目をすくと出るんだてエますが、何説が真正ですか御裁判を願ひます」

乙「ウン、是は山吹の枝からも畳の目からも出んで、皆行燈の抽斗から出るぞ」

と機智い事を申ました。何んでも住んでる所の風に染まると云ふは奇態ナ者でゲス。

旦那「ジャアマア和郎は全体どうも誠に口数が多くて困るヨ、些と黙つてるが宜い」

小僧「へー……だツて尊公が御用だてエから爰へ来たんです、御用てエのは何んデス尊公、御用だてエから用かと思つたんです。他の者がアヽ長どん何にか旦那が御用だてエから、早くお往でてエから、嬉しいやうナ怖いやうナ変的箇ナ心持で来たんでス。何にか遣て下さいナ」

旦那「ア……彼れだもの為やうが無エノ……其方は口から先へ生れた奴に違エ無エ」

小僧「イエ何うでしたか夢中で生れましたので。私の生れる時に阿母さんが無闇にいきんだそうで、其中生れツちまツたんですが何んなら一寸往て取揚げ婆アさんに聞いて来ませうか」

旦那「エー……余計ナ事を云ふナ。真正に為やうがねエ……悴や、此奴には何うも誠に困りますヨ。和郎が余まり可愛いがるもんだから、段々増長して為やうが有りやアしねエ。過般も乃公の随行をして頭へ痰を吐ツかけやアがつたから、何故斯ンナ事をすると叱言を云たら、平生は飛び越すんだが今日は好く往なかツたてエやがる。シテ見ると折々行るんだ」

小僧「ヘエ……誠にお気の毒さまで」
旦那「チョッ、何にがお気の毒でエ」
若旦那「コレ長松、何故然う一々阿父さんを面折るんだヨ……今日は尊台不動さまエ」
旦那「ムー予は代参を遣る所存だから」
若旦那「神信心のお出掛けですから、今日は御勘弁を願ひます」
旦那「不動さまに免じて堪忍して遣るか。已来気を注けろ」
小僧「ヘエ。お小言は成丈け烈しくなく不動が宜う御座います」
旦那「アンナ事を云やアがる」
小僧「今日は不動さまへお参りに往らッしやるんですが、道理で譴責を喰ひました。尊公は金加羅童子、私は勢多加童子、番頭は八大童子、三十六童子で譴責を喰ふのは一番大鈍痴だ」
旦那「為やうのねエ奴だ一々何にか云ひアがる……悴や、和郎些と小言を云つて呉んナ」
若旦那「ヘエ其代はりお参りから帰つて参つたら、土蔵の中へ入れて三日も出さん事に致します……帰つたら見やアがれ、土蔵へ投り込んで出さんから然う思つてろ」
小僧「ヘエ有難う御座います」
旦那「アレだ、礼を云てやアがる……何んで礼を云ふんだ」
小僧「三日四日楽寝が出来らア」
若旦那「然んナ事を云ふと一月も二夕月も出さんから然う思つてろ」
小僧「八月たッたら出すだろう。出さんと流れますヨ」
旦那「質だと思つてやアがる。為やうのねエ奴だ……早く往て来い」
小僧「早く往つて来いたッて然うは参れません。自然法体と歩行いて往くんで其辺にお気が附かれやせんか。年に不足もなく然んナ事を云ふと品位が下りやすぜ隊長、手毛列のバアー」
旦那「バアー抔を入れやアがッて真実に為やうが無エノウ……早く往つて来い」
若旦那「ヘエ往つて参ります」
小僧「ヘエ往つて参ります……真正に驚いたナ、早く往つて来いなんテ……門外へ出ると好い心持ちだナア。若旦那〳〵」
若旦那「何んだ」
小僧「大旦那は無闇に宅で八釜敷小言斗り云てますから世間で然う云てますぜ、鳶が鷹ア生んだッて。阿父さんが鳶で尊公が鷹だてエますぜ。真実に感心、ヤイ鷹々」
若「何んだヨ騒々しい。些と黙つて歩行きナ。阿父に大変叱られたから、小言賃に何にか馳走て遣らうか」
小僧「エー馳走て下さい。お汁粉は忌だなア」
若「南京豆塩煎餅豌豆に湯煮小豆は何うだ」
小僧「廉い物斗り云ふですネ、深川の平清か松本で御飯が喰ひてエナ」
若「生利ナ事を云ふナ。小供の癖に御飯が喰ひてエなんテ」
小僧「小供だッて人間ですもの、お腹が空けば御飯ア喰べます。隊長頼むぜ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

若「何んだ隊長なんテ。真正に困る奴だ」
小僧「早く挽車に乗つてガラ〳〵〳〵と往きてエナ……オイ若い衆さん〳〵」
若旦那「何んだツて挽車夫を呼ぶんだヨ」
小僧「若い衆さん、こう汚い車は往けないヨ。二人乗は困ツちまう。梶棒の反た底の深い車、心棒に草鞋が八足半ぶら下つてるのは御免蒙むろ。俺等は商法人だから十露盤上で乗るが、アノ蠟色の車が好いナ。目倉縞の筒袖腹掛後鉢巻を為てエるのが威勢が好いナ……若旦那早くお乗んなさい」
若旦那「コ、レサ無闇に乗ツちまツては往けない。直段も定めずに乗ては為やうがないナ」
小僧「直段だツて若旦那大抵程が有りやす。一里何銭とチヤント極てやすから、警察署へ往つたツて交番へ出たツて然んなことは驚きやせん……若衆さん、モツト急いで往きねエ」
若「何故扇で若衆の背を打つんだ」
小僧「打つたツて……嬉しいナ、ウン嬉しいナ、若旦那人力車は日本の発明だてエますが、然んナ事は少し心得てなければなりやせんネ。嬉しいナ、向ふに見エる烟突から烟が出てエるが火事ぢやアないか知ら……イヤー金鍔を喰つてやアがる、一個喰ひてエナ、面白エナ」
若「少し黙つて往なヨ」
小僧「何にか云ひながら往かなくツちや可笑しく有ません、若旦那」
若「ウン」
小僧「尊公に絵草紙屋のお蝶さんが恋慕てますヨ」
若「馬鹿ナ事を云て。何うして小供に然んナ事が解るものか」
小僧「小供だツて一概には云へません、俺見たやうナものも有ます。三千九百万撰抜きの器械の亀の甲小僧ツてんですか。絵草紙屋のお蝶さんや何にかゞ裏の裁縫の師匠の処で稽古して居ながら尊公の事を家橘に似てエるツてんですが、若旦那ア何にか呉れても宜いや……嬉しいナ。人間が陸続通るが皆ンナ男と女斗りだ、ウン嬉しいナ……オツト若衆其処で宜しい、結構。ソノ松本の此方の所へ梶棒を突いてお呉れ……チヨツト茶屋のお坐敷の寸法を聞いて見ませう……ヘエ今日は、御免下さいまし」
女中「コレハ入らツしやいまし。お伴さん御苦労さま」
小僧「姉エさん、お伴さん御苦労さまてエのは失敬でせう。俺だツて同し人間だ、何方が主人で何方が家来だか解りも為ねエ内に俺を捕めエてお伴さんてエのは何う云訳です。一番議論に及びませう」
女中「ホ、コレハ妾が過言りましたネ。真正にマア宜うこその御入来で先日は有難う」
小僧「ナニ今日始めて昇たんで」
女中「ホ、今日は誠に結構ナお天気さまで」
小僧「生憎曇天て居まして誠にお気の毒さま」
女中「真正に口の軽い小僧さんで居らツしやる事」
小僧「ヘエ何貫目有まして。俺の口の貫量を衡た事が有ますか」

女中「アラマア、顔から火が出ますヨ」
小僧「物騒な顔だ、和女の顔はマチ入らず」
女中「アラ何うも。何にも妾には云へません。左様なら」
小僧「姉エさん、俺は今来た斗りです。お頼み申やすぜ……ネエ若旦那ア」
若「何んだナ、ベラ〳〵饒舌ツて……お女中誠に済みません。此者は小供の癖に誠にお饒舌りナ奴で。只今も小言を申た斗りゆゑ何うぞ御勘弁を願ひます」
女中「イエ何う致しまして。小僧さんの云ふ事が真正で御坐います」
小僧「若旦那ア、ズツとお昇り遊ばせ。笑アせやアがる、無闇に遣り詰められて堪まるもんか。文明国の明治ツ子だ……嬉しいナ、姉さんお座敷は何方だエ」
女中「ハイ此方へ……」
小僧「イヤー成程、コレは好い座敷だ」
女中「ヘエお敷物を」
小僧「イヤー縮緬の上等のお布団か。此上へ乗ると公方さまに成たやうだ。俺のと若旦那のとお揃ひだが此布団は廉くは出来めエ。此切は一尺何程位エだろう」
若「然んナ事を云ふナヨ」
小僧「お茶屋は真正に主人も家来も布団がお揃ひだから感心だ……イヤーお茶菓子に蒸羊羹が二タツ切御座いますのは二人で一ツ切ツツ喰べるんでせう」
若「五月蠅ナア」
小僧「オヤ又跡から二ツ来た」
若「喰ひたけりやア喰ひナヨ」
小僧「嬉しいナ、斯う二タ切ツツ出すのは喧嘩が出来ると往けないからでせう」
若「誰が菓子なんぞで喧嘩アする奴が有るものか」
小僧「何うも感心。若旦那一個尊公召上れナ」
若「宜いから喰ひナヨ」
小僧「半紙を一枚戴いて、此菓子を斯う包んで袂へ入ツちまつて、そしてお跡のを一ツと……」
女中「お誂ひ物は」
小僧「成丈け上等になすツて下さい……嬉しいナ、中々好いお座敷だ。床の間の容子から違ひ棚の工合が古風だねエ。イヤー向ふの泉水は潮入りだ。緋鯉が麩を喰べてやアがらア。亀の甲三疋甲を乾してる……イヤー嬉しいナ、杯洗が来た〳〵。若旦那金の杯洗が来ましたから御覧なさいヨ。観音さまの手洗鉢百分一。下婢が跡からお銚子を持て来ましたヨ。オヤ〳〵跡からお膳も来ました……コレハ尊公のお膳ですヨと、コレハ俺のお膳だヨと。お膳やお膳重いと軽いか感心だネ」
若「何にを云てるんだナ」
小僧「九谷のお皿に青地の鉢で、硝子が三個お膳に乗つてるのは感心ですネ……姉エさん憚りさま、お酌を。オツと酒は燗、肴は気取り、酌はタボか。姉さんもタボの端暮と……姉さん怒り

ツこなし〳〵。四海皆兄弟だからネ。憚りさま。中々上等お酒ですネ。これが当時評判の正宗と云ふんでせう」

若「余計ナ事を云ふナヨ」

小僧「嬉しいナ……一合六銭位しませう」

若「何故価を聞んだ、見共ない……姉さん、御免下さい」

小僧「姉さん、煮肴が先で刺身が跡で前後しても宜いから、出来たものをズン〳〵持つて来て下さい」

女中「畏りました」

小僧「若旦那、小僧のお酌でお気の毒さま……オツと覆れた、勿体ない」

若「何故ソウ畳をベロ〳〵舐るんだヨ」

小僧「早く何にか喰ひてエナ」

若「宜いから先きへお喫り」

小僧「お喫りたツて尊公より先へ小僧が喰べては法律に背くやうナ者で」

若「面倒臭い事を云ふナ。許すから先きへ喰べろ」

小僧「ウン嬉しいナ、イヤー味噌汁が這入てる……此方のお椀は何んだらう、イヤー何んだ御飯が這入つてらア……尊公に此方のを進げませう。嬉しいナ、お先きへ頂戴致ます。中々美味ナ、宅の乾葉の味噌汁たア違わア、変に臭くねエからネ……田舎味噌も斯うすれば喰へる。此味噌は矢張り十六屋で買つたのか知ら。料理番に半助遣りていが生憎一銭も無エヤ。宿下の時に小遣ひ三十銭だから心細いナ。十銭で土産を買つてくと、跡二十銭しか無い中で二区鉄道馬車へ乗ると、残十六銭きやア無エか。今年は五十銭になるかも知れねエ……ア、美味は美味が椀中にお肴がモウ無いヨ」

若「何故箸でお椀を突附いてるんだ。無ければ沢山お替はりを為て喰ベナ」

小僧「余り美味いから椀ごと喰べやうと思つた位で……オツト若旦那〳〵」

若「エ、ー喫驚り為た」

小僧「芸者が来たから御覧なさいヨ。御覧なさいツたら御覧なさいヨ、美い婦女ですから。サア芸者が便所へ来ましたから、若旦那御覧なさいヨ。美い婦女だが島田が少し曲つてるネ。鬢の乱れ髪枕の咎よ夫を和郎に疑ぐられと云ふ三下り、頭髪を御覧なさいヨ。便所へ這入りましたヨ」

若「為やうのねエ奴だナ……知つてるヨ。チョツ袂を放せ」

小僧「コレハちと恐入りました。咬へ烟管で烟草を喫んで澄ましても往けませんヨ。若旦那、見度なら見度と云ツちまう方が一等罪が減じますゼ。忌やに澄ましてるのは却て見共ないから、サア御覧なさいヨ」

若「知つてるヨ……アツツ……其方のお影で雁首を頬へ押附けた……些と黙つてろ馬鹿ア」

小僧「イヤー是は驚きました、是りや驚いた」

若「先刻から知つてる〳〵と云ふに、無闇に騒ぎやアがつて。何処の奥さんだか お嬢さんだか知れも為ない仁を芸者なんていへつ〉

て若し失礼が有たら何うする」
小僧「宜い面ン皮だ……お嬢さんか奥さんか解らねエやうナ小僧たア小僧が違ひます。芸者も芸者、而も尊公に恋慕てる芸者なんで……気が有れば眼も口程に物を云ふてエ譬の通りで、尊公の顔を横浜の火事を小石川で見るやうにかすかに見てエましたが、余程恋慕てる証拠が有やす」
若「何んで恋慕てる証拠が有るんだ」
小僧「だツてサ若旦那、アノ芸者が便所の戸へ手を掛けながら、下谷の法華宗の講中見たやうに、七五三に眼を附けて尊公のお顔を見る様な見ない様な……夫でも大抵寸方が知れまさアネ。夫から小便を為て仕舞て外へ出て、手を洗ツちまつてから手拭で手を拭いて、何時までも懐中から白紙を出して口で紙を取つては手を拭き、其紙屑を捻て放棄りながら邪見ナ顔をしてトン〳〵〳〵と往ツちまいましたが、若旦那アノ紙屑を拾て来ませうか……」
若「紙屑なんどを拾て来なくても宜い」
小僧「エーお銚子が参りました。お熱い処を一口……姉さん此方へ〳〵」
女中「ヘエお変はり目……お手許拝見」
小僧「若旦那、俺がお酌を致ませうか……宜いから召上れ〳〵。姉エさんお酌を頼みます……ヘエ若旦那からお使ひ物、サ、アーンと口をお開き。アーンとお開きなさいたら。ソウお膳の側へ置いて困りますナ……然んなら俺が喰ツちまふ」
若「ヲイ、夫れは予の箸だヨ」
小僧「然んなら俺の箸と取替へませうか」
若「同じ事だ。為やうがねへな」
小僧「へ、嬉しいナ……姉さん一寸伺ひますがネ、今用場へ芸妓が一人来たんでゲスが、俺は芸者だと云ふに此者は……」
若「何んだ、此者はとは」
小僧「失礼御免下さい。若旦那が云ふにや何処の奥さんだかお嬢さまだか知れないのに、然んナ事を云て失礼が有たら何うするツて、ボカ〳〵〳〵と拳骨を頂戴したんだが、何ん程主と家来たツて、憲法発布も有る所で無闇に殴打れる位なら、人民同権もない訳だのに、余計ナ事を云ふナツてボカ〳〵〳〵とお出なすッたんだが、芸者が真正か奥さんが真正か一ツ御裁判を願エ度ネ」
女中「何うも恐入りました事……若旦那此事は尊公がお負ないましたヨ。彼は山谷堀の大和屋の小千代さんと云ふ芸者衆で、木場のお客さまの一座で幇間の正孝さんに花洲さんの二人が来てですが、モウ御飯も召上つてお帰へりになる処です」
小僧「ヘエ何んですか、イヤー大和屋の小千代姉さんですと。イヤア俺ア知つてます」
若「其方ア何うして芸者を知つてるんだ」
小僧「ナニネ過般俺が本郷へお遣ひに往た時に、切通しで方々の書生さん方が集て写真を見て居ましたから俺も立て見てエると、書生さん方が美い芸者だノウツて、小千代さんの事を云つてたんだ。ヘエ代価は一枚二銭五厘」
若「何を云つてやがる」

小僧「併し写真顔より見た方が美うゲス……チヨイト姉さん姉さん」
女中「ハイ」
小僧「アノ芸妓衆と一緒に成つて御飯を喰べてエんですが、一寸爰へお出張りを願度エのだが。俺が然う云たツて小千代さんに花洲さんに正孝ウ……結構ウ……お膳を三個お肴を見繕て、お酒は麦酒ブランデーアルコールサンパン泡盛葡萄酒甘酒に白酒をどつしり持つて来てお呉れ。アヽー早晩に芸者衆が来るんだネへ、嬉しいナ若旦那」
若「堂するてんだ馬鹿ア」
小僧「ア痛い。またボカリは驚きましたナ。斯ンナ痛い何うも茶屋はないネ」
若「馬鹿奴。真正に予は茲へ来たのさへ驚いて居る所だのに、又、芸者だの幇間を呼ぶとは何んだ。此上芸者や幇間を呼んだら何の位消費か知れやア為ねエ」
小僧「堂せ些ツたア入費が掛りまさアネ。先づ五十両お出しなさい」
若「何んだと五十両……茶屋へ来た事さへ阿父さんに知れたら何う為やうかと思つてる所だのに、五十両も消費て見ろ、予は勘当されなけりやならない」
小僧「大丈夫ですヨ、御心配なさるナ。長男除きは出来やア為ませんからお案じなさるナ。親子の縁の切れなく成たは王政御維新の政府の有難い処でゲス。学問をなすツて少しヅツ愉快をするが人間の真正の所でゲスが、尊公は家を潰しますヨ。売家を唐様で書く三代目では有ませんが。併し一旦潰した上で尊公のお力で再び身上を取返エすのが真正の人間じやア有りませんか。感心ナ小僧だと誉めて宜う御座いませう。併し美い婦女でゲセう。何うも先刻両方で変手箇でしたゼ。先方でニツコリ此方でニツコリ、合せて四ツコリ笑ひや何にかしたから訝しいナ……何んだツて、是から彼の芸者が茲へ来れば大変ナ事に成ツちまふんだ。人をつけ、若旦那ア、デレ〳〵為ツちまいませう」
若「然んナ事が有るものか……早く先方へ往て断つて来い」
小僧「断れッたツて……一旦来いッたんだもの断わりやうがないヤ……先方の芸者は今頃惚気て居ませう。アノチヨイと正孝さん花洲さん聞いてお呉れヨ、下の御座敷にネ、何家の子息さんと小僧さんが居たんだが私はソノ子息さんに岡惚れを為たノ……姉さん何んか頂戴か何にか云つてる処へ往て、断わりを云ふのは御免を蒙りやせう。アラ真正に往けないねエッて癪でも起されると是れ即ち人命に拘はる一大事……」
と、是より此小僧さんの取持ちで睦い情交になると云ふ、小千代清三郎馴れ初めのお話で御座います。

〔「百花園」一巻一号　明治22・5・10〕

成田小僧（下ノ巻）

三代目三遊亭円遊口演
酒井昇造速記

エー相変らずお若輩のお噂を一席弁じ上げます。久しく御当社の雑誌へお噺を出しませんで御座りましたが、今日は第壱号に出しました成田小僧の後談を少々弁じます。エー昨今に至りますと諸方へ学校も開けました事で御座いまして、小供衆のお智慧の進むで来たと云ふのは、実に之れが日本盛大の原因と言つて宜しい位で。円遊ども抔は別に学問も有りませんから、好い年齢をして小供衆に教はるやうな事が度々御座りますで御座いますが、併し先達円遊も驚きましたのは、小供衆の前で嘘りお化け……と申したら

○「円遊、文明国に幽霊は有りませんヨ」

と謂はれまして、大きに恥入りました位のもので御座います。ダガ併し夫もお年頃に成りますといふと、チヨイと恭順い御子息さんや、嬢さま方が、何様に夫やア学力が有つても魔の刺すてエ事が有ります。鳥居数を漸く潜つてから少壮時の事を考へますと、随分恥入る事が幾件も御座います。が往時は恋煩ひ抔と云ふ病気が有りました。現今では爾う云ふ病気は無く成つた代りには、他の病気が殖えました。虎烈刺病とか、乃至は条虫或ひは又傻麻質斯、肋膜炎、乃至は百花園……是は病名では有りません。雑誌の名称で御座います。併し恋煩ひ抔といふ病気は、少し容貌が好くなければ工合が宜く有りません。円遊然とした人間が痩衰へて居る処へ友達が来て

○「何うしたエ、甚く此節は鬱悶で居るぢやアないか」

△「アー、恋煩ひで……」

と言つた処が容貌に有りません。且円遊どもは病気の方なら痔てエもんとか、乃至は彎脊骨に成るとか、何とか爾ういふ風の病気なら宜しい位で御座いますが。恋煩ひは幾らも有りました。随分泥水稼業の者で夫りアどうも有りました。

○「アノ芸者はどうもいかん、此娼妓はいかん」

抔と一口に被仰いますが、どうして中々其社会へ這入て視ますと、左様なもの計りでは有りません。夫りアどうして親孝行も有れば、貞女両夫に見えずと云ふ、賢女なり、貞女なり、烈女なり、トコまかしてヨイトコシヨ……是は余計のお話でげすが、泥水稼業の社会に随分実着い者が幾らも有ります。

婆「エー御免なさい……誠に御無沙汰を致しました」

○「オヤ之れはお珍らしう御座いますナ。何ヤお新ヤなんだヨ、山谷堀の大和屋の老母さんがお入来に成つたヨ」

新「オヤまア久しくお目に係りませんでした。ツイ鼻の先に居りますから、チヨイと参堂なければならないと思ひながら私事にか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com